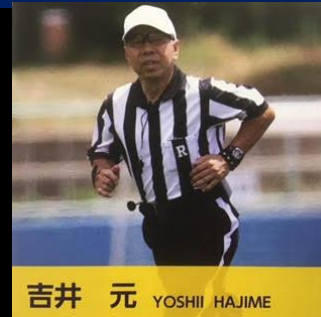




「明治マルチプルオフェンスの生みの親」野崎和夫総監督

【1955年卒、1962年～1999年監、公式戦通算成績165勝81敗4分】

殿堂入りの野崎総監督(1955年法学部卒)のことをよく知らないという父母会員の方もいらっしゃると思いますので、1968年の甲子園ボウルには選手で、1994年の甲子園ボウルにはレフリーで出場された現役審判員としてご活躍のグリフィンスOB吉井元様(1972年商学部卒)に、現役時代の野崎監督の素顔、戦術のことを伺いました。



吉井 元 YOSHII HAJIME



・ご経歴・・・

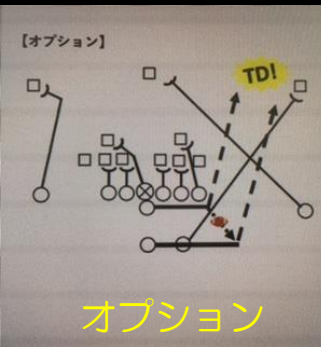
野崎監督は卒業後、数年防衛大学のコーチをなさっており、教え子に京都大学元監督水野弥一さんがおられます。明治大学での37年間の監督在任中に4度甲子園ボウルに連れて行ってくださった名将です。残念ながら優勝にはあと一歩手が届きませんでした。「無冠の名将」と言えるでしょう。特に23回(1968年)は36-38(余談ですが私は1年生でした。)第31回(1976年)は22-29、そして今も語り継がれている第40回(1985年)は46-48でした。第30回は(1975年)は7-56の大敗でした。

・グラウンドでは・・・

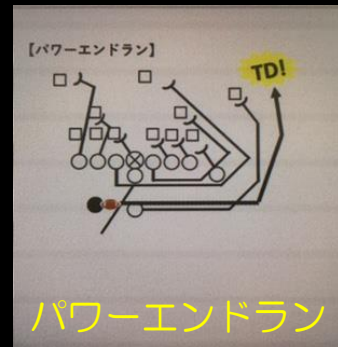
「フットボールは万が一、千が一、百が一、拾が一ミスがあったらダメなんだ！」が野崎監督の口癖で、グリフィンスHPのHISTORYにも書かれています。練習は基礎技術の反復・反復でした。ミスをするとうるさく石が飛んできました。野崎総監督はQB出身ですからコントロールは抜群でほぼ百発百中で、ヘルメットに当たりました。昔のヘルメットは今のものと違って中が空洞(通称:吊天井)でしたから、よく響きました。

・おやし部屋では・・・

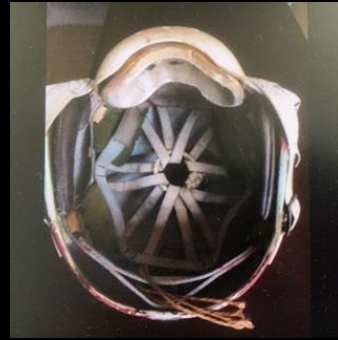
我々は野崎監督を親愛の念を込めて「おやし」と呼んでいました。グラウンドでは、厳しい野崎監督でしたが、練習後は監督部屋(通称:おやし部屋)に呼ばれ、クォーターバック(QBの心構え・プレーの組み立て方等々)について、丁寧に教えていただきました。その頃のオフェンス体型は非常にタイトな体型でしたが、いち早くプロ体型を導入し、看板プレーであるオプションを展開しました。ライバル校である日本大学の故篠竹監督が「闘将」なら、野崎監督は「知将」であったと言えます。



オプション



パワーエンドラン



顔を守るのは、現在のような頑丈なものではなく、空洞のプラスチック製で写真の2本バーで、QBは1本バーでした。右の写真は釣天井。内部このようになって、よく響きました。